

第 19 回東海小児整形外科懇話会

当番幹事：和田郁雄(名古屋市立大学整形外科)

日時：2004年2月14日(土)

場所：大正製薬(株)名古屋支店8階ホール

主題：小児骨関節感染症

一般演題 座長：堀内 統

1. 先天性筋強直性ジストロフィーの5例

愛知県青い鳥医療福祉センター整形外科

○筒井 求・岡川敏郎・栗田和洋

男児1例，女児4例であり，受診時年齢は平均2歳2か月であった。整形外科領域における主な問題点として全例に尖足，2例に膝過伸展，3例に股関節亜脱臼を認めた。尖足，膝過伸展に対しては可動域訓練および短下肢装具着用下に立位・歩行訓練を行い，股関節亜脱臼に対しては経過観察中である。現在2例は独歩，1例は膝立ち移動が可能になっている。本疾患の治療について文献的考察を加えて報告する。

2. 家族性痙性対麻痺に対する尖足矯正手術

愛知県青い鳥医療福祉センター整形外科

○栗田和洋・筒井 求・岡川敏郎

脊髄小脳変性症の一種である家族性痙性対麻痺は，下肢優位の錐体路症候による痙性歩行，尖足変形を呈する遺伝性疾患である。今回，進行性の尖足変形を呈した2名(男子2名，17歳，16歳)に対し矯正手術を行ったが，痙性に隠れた筋力低下が術後明らかとなり歩行能力の改善はさほど得られなかった。

3. 外傷性大腿骨頭壊死症に対し外転歩行装具により治療した1例

名古屋大学整形外科

○増井徹男・北小路隆彦・長谷川幸治
石黒直樹

症例は10歳，男児で交通事故により右大腿骨頭部骨折受傷。鋼線牽引施行後，受傷6日目に観血的骨接合術を行った，術後は免荷していたが術後4か月のMRIで壊死を認めた。術後7か月のMRIでは壊死病変の縮小を認めたので，外転歩行装具で荷重を開始した。受傷2年3か月の現在疼痛なく独歩可能である。本症例の壊死部は外転位で非荷重部となったので，外転歩行装具により荷重を許可したが，良好な壊死修復が得られた。

4. 1歳8か月児に認められた骨盤部好酸球性肉芽腫症の1例

あいち小児保健医療総合センター整形外科

○野上 健・服部 義

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

矢崎 進

愛知医科大学整形外科

佐藤啓二

歩行，起立不能を主訴とし，診断までに約1か月半を要した骨盤部好酸球性肉芽腫症の1例を経験したので報告する。症例は発症時年齢1歳8か月の男児。誘因無く跛行を呈し，1週間後には歩行不能となる。他医療機関を2か所受診するも異常を指摘されず，症状が継続するため当センター受診。下肢の画像，理学所見で明らかな異常を認めず，背髄疾患の除外目的に腰椎MRI検査施行。骨盤部に骨腫瘍像が認められ，切開生検にて好酸球性肉芽腫症と診断された。

5. 小児骨形成不全症に発生した両側肘頭骨端線損傷の1例

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科

○長倉 剛・西山正紀・二井英二

上野総合市民病院整形外科 山崎征治

三重大学整形外科 内田淳正

症例：15歳，女性。11か月時に骨形成不全症type Iと診断され当センターにてfollowされていた。11歳時に左肘頭骨端損傷(Salter-Harris分類II型)，また治癒後12歳時に右肘頭骨端損傷(Salter-Harris分類II型)を認め，いずれも観血的整復固定術を行い良好な結果であった。小児骨形成不全症に発生する両側肘頭骨端線損傷について考察する。

6. 難治性内反足に対する前脛骨筋腱移行術併用の治療経験

岐阜県立希望が丘学園整形外科

○吉田 実・徳山 剛・岩佐一彦

経験した症例は3例4足(先天性内反足1例・麻痺性内反足2例)，手術時年齢は7～16歳である。先天性内反足症例は，2度の軟部解離術が既に施行された難治例であり，他は初診時通常の解離術のみでは矯正が困難と診断された症例である。これらに対してHofferらの方法に準じた前脛骨筋腱部分移行術を併用した。術後，3例中2例に足関節背屈時の外反が可能となり，良好な結果が得られたため，文献的考察を加えて報告する。

症例検討

座長：石井 要

7. 肘関節伸展制限などを認めた四肢短縮型小人症

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科

○二井英二・西山正紀・長倉 剛

上野総合市民病院整形外科 山崎征治

三重大学整形外科 内田淳正

症例は7歳の女児で，某院にて軟骨無形成症と診断され成長ホルモン療法中である。身長104cm指端距離98cmと四肢短縮型小人症で軽度の前頭部突出を認める。手指の短縮は軽度で三尖手はみられず，肘頭後脱臼によると思われる肘関節の伸展制限がみられる。肘関節・膝関節などのX線所見も典型的な軟骨無形成症とは異なっている。軟骨低形成症など他の骨系統疾患も疑われることから，診断についてご検討願いたい。

8. 重度の膝窩翼状片の1例

静岡県立こども病院整形外科

○芳賀信彦・三浦 哲・滝川一晴
女児。仙骨欠損、鎖肛、腎尿路系形成異常を伴い、生後1日でS状結腸瘻造設術を受けている。右下肢に重度の膝窩翼状片があり、内反尖足を示す足の踵部が会陰部に近接している。X線上、股関節のアライメントは良く、翼状片の中で膝関節の自動屈伸は可能。2か月時に膝窩翼状片の形成術を行ったが、坐骨神経がlimiting factorとなり膝屈曲拘縮が残存している。膝、足部に関し今後の治療方針を討論して頂きたい。

主題：小児骨関節感染症

座長：土屋大志

9. 化膿性閉鎖筋炎の1例

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

○高嶺由二・伊藤弘紀・矢崎 進
沖 高司

あいち小児保健医療総合センター整形外科

服部 義

症例は7歳、男児。誘因なく発熱と左股関節痛出現。他院より左股関節炎疑いにて当院へ紹介された。来院時理学的所見は左股関節可動域、特に外転外旋に制限があり、CRP 11.1、X線写真では左坐骨部に骨融解像を認め、MRI T2強調像にて閉鎖筋周囲に高信号領域を認めた。以上の所見より左化膿性閉鎖筋炎と診断して抗生剤静脈内投与を行い、数日で症状は軽減した。若干の文献的考察を加えて本症例を検討する。

10. 化膿性仙腸関節炎の1例

長野赤十字上山田病院整形外科

○加藤光朗・山田順亮

比較的稀な小児化膿性仙腸関節炎の1例を経験した。症例は13歳男性。本年9月1日より右臀部痛出現した。4日当科初診、坐薬投与にて帰宅させたが翌朝疼痛憎悪、体動困難となり入院。体温38.6°、右臀部の腫脹を認め、血液検査で高度の炎症反応あり、MRIにて仙腸関節にT2高信号域を認めた。感染と判断し、当初ユナシンS投与したが無効、8日チエナムに変更したところ症状は徐々に改善した。血液培養は陰性であった。

11. 11歳女児に見られた両側の化膿性股関節炎の1例

愛知県厚生連海南病院整形外科

○植田裕昭・西 源三郎・多湖教時
土屋大志・向藤原由花・安藤喜一郎
住田篤紀・勝田康裕

小児の化膿性股関節炎は乳幼児に多く見られ年長児は稀である。今回我々は、11歳女児に見られた両側の化膿性股関節炎の1例を経験し、緊急での排膿手術を行い良好な結果を得たので報告する。

12. 早期診断、治療した乳幼児化膿性股関節炎

愛知県厚生連海南病院整形外科

○土屋大志・西 源三郎・多湖教時
向藤原由花・安藤喜一郎・住田篤紀
勝田康裕・植田裕昭

乳幼児化膿性股関節炎による重篤な機能障害を防ぐためには早期に診断し確実な排膿を行うことが最も重要である。今回我々は、10例10股関節の乳幼児化膿性股関節炎に対し超音波検査にて早期診断し、緊急での排膿手術をLudluffのアプローチで行い良好な結果を得たので報告する。

13. 小児化膿性股関節炎および後遺障害に対する治療経験

名古屋市立大学整形外科

○早川高志・和田郁雄・堀内 統
若林健二郎・大塚隆信

愛知県厚生連海南病院整形外科

土屋大志

小児化膿性股関節炎は緊急処置を要する小児整形外科疾患の一つで、治療の遅れは重大な後遺障害を惹起する。1998年以降当科で治療した本症6例の治療概要について報告するとともに、問題点や疾患背景の変化について検討した。

14. 化膿性股関節炎により大腿骨頭の消失を生じた3例の治療経験

愛知県立心身障害児療育センター第二青い鳥学園整形外科

○宮田 徹・吉橋裕治・則竹耕治
名古屋大学医学部附属病院整形外科

北小路隆彦・鬼頭浩史・加藤光康

1987年以後経験した新生児・乳児期化膿性股関節炎による後遺変形例のうち、大腿骨頭の消失を認めた3例の経過について、施行した治療を含め検討した。片側罹患の2例には、それぞれ頸部形成を含めた観血的整腹術、Weissman手術等を、両側の1例に対しては理学療法のみを行った。問題点はあるが、前二者では比較的良好な支持性が得られ歩容異常も軽度であり、両側例では実行的歩行が可能となっている。

特別講演

座長：和田郁雄

日本整形外科学会研修会

乳幼児化膿性股関節炎後遺変形の治療

福岡市立こども病院・感染センター副院長
藤井敏男